

12

1852年、ロンドンに生まれたジョサイア・コンドルは、サウスケンジントン・アートスクール、ロンドン大学で建築を学ぶ。設計事務所で実務に就く中、王立建築家協会主催の設計競技に入賞し、ソーンメダルを獲得。将来を嘱望されていたが、日本政府に招聘され、工部大学校造家学科の教師に着任した。弱冠25歳。以後、近代建築黎明期の建築界を牽引する重責を担った。日本建築界の重鎮たちは、ことごとく彼の薫陶を受けたことになる。また、日本政府の委嘱として、鹿鳴館や東京大学の校舎を始め、多くの公共施設も設計し、建築遺産も残している。1888年、官職を辞し、設計事務所を設立して幅広く活躍するが、三菱、三井など財閥関係の大邸宅を得意とし、晩年は特に邸宅建築家として不動の地位を築いた。一方、来日以前から興味があった日本文化を熱心に探求し、河鍋暁斎のもとで日本画を学び、造園や生け花の著作を発表するなど、海外における日本文化の理解にも尽力した。今シリーズの最終回になる今号は、日本建築界の礎を築いたイギリス人建築家、ジョサイア・コンドルに焦点を当てた。

 ジョサイア・コンドル
 Josiah Conder


出典：「鹿鳴館の建築家ジョサイア・コンドル展」図録

鳥津忠重 本館南面ベランダ部詳細図
 [所蔵：京都大学大学院工学研究科建築学専攻、
 出典：「ジョサイア・コンドル建築図面集3」[河東義之編、中央公論美術出版/1981]]

建築家という存在 | 鈴木博之 | Hiroyuki Suzuki

1—西洋建築の父

「鹿鳴館」[1883]の設計者として知られるイギリス人建築家ジョサイア・コンドルは、わが国の西洋建築の父といわれる。弱冠25歳で来日した彼は、工部大学校の外国人教師として建築のあらゆる側面を教授した。“建築のあらゆる側面”というのは文字通りこの内容を意味するものであって、建築設計技術だけを意味するのではない。建築の造形、構造、設備は無論のこと、材料の調達、建設工事、管理運営、さらには暮らし方の指南にまで、コンドルの仕事は広がっていたのである。

一例を挙げておこう。明治30年[1897]8月30日、ロンドンの日本大使館に勤務していた加藤高明が、大量の西洋絵画を深川の岩崎久彌あてに発送した。これは「岩崎彌之助深川別邸」[1889]の各部屋を飾るための絵画群であり、深川別邸を設計したコンドルが、各部屋の大きさに合わせて寸法を指定し、購入を計画したものであった。邸宅を設計しただけでは紳士の生活は成立しない。そこにふさわしい家具調度を整え、絵画まで飾ってようやく、貴顕紳士と呼ばれるにふさわしい生活の場ができあがるのである。コンドルはそこまで計画し、手配しなければならなかった^[1]。

岩崎家のために絵画を購入したのは、ロンドン在住で来日経験もあり、コンドルとも親しかった画家のアルフレッド・イーストであり、実際に奔走した日本大使館の加藤高明は岩崎彌太郎の女婿であり、久彌の義兄弟であった。のちの首相もここでは岩崎家の使い走りである。

このように、邸宅の使い方にまでアドバイスを与えたコンドルは、無論、つくりあげるべき建築の様式の選択から、構造まで決定していかねばならなかった。コンドルは、イギリスではゴシック・リヴァイヴァルの大家であったウィリアム・パーージェスのもとで学び、同時にロンドン大学でT・ロジャース・スミスの薫陶も受けた。そしてイギリス建築家協会が行っていた設計コンクールであるソーン賞に応募して入賞、ソーンメダルを受けた。この経歴は19世紀の建築家らしい、多面的なものである。すなわち、彼は徒弟的に建築家のもとで修行して建築家になっていく道と、学校教育を通じて専門知識を身につけていく道を、ともに経験したのであり、設計コンクールによって頭角を現すという近代的建築家のコースもたどっているからである。こうした経歴は、のちに彼が教育と実務の両面を受け持たなくなる際に、極めて役に立ったのではないと思われる。このように将来を嘱望される若者が、日本政府の招きに応じてわが国にやって来たのだった。

2—日本にあこがれ、日本を愛したコンドル

コンドルがなにゆえ日本政府の招きに応じたのかは、よくわかっていない。彼は工部省が設けた工部大学校の教師として来日するのだが、工部大学校の教師たちの多くはグラスゴーから招聘されていた。グラスゴーは当時、造船をはじめ工業の中心として知られていたし、幕末に長州藩を抜け出てイギリスに向かった若者のうち、工学に興味を持った山尾庸三はグラスゴーで経験を積んでいたから、外国人教師がグラスゴーから招かれることになるのは、ごく自然であった。建築の面でも、やがてチャールズ・レニー・マッキントッシュがこの町から現れることを考えるなら、建築の教師がグラスゴーからやって来たとしても不思議ではなかった。

ロンドンで学んだコンドルが建築教師として来日することになったのは、やはりロンドンには建築など文化的な領域での人材が多かったのと、コンドル自身が日本に興味を抱いていたためであろうと考えられる。無論、その橋渡しをする存在はあったであろう。もっとも可能性が高いと考えられるのが、ジャーデン・マセソン社である。幕末の長州の若者たちの脱藩と渡欧を手助けしたこ



岩崎彌之助深川別邸 | コンドル初期の作品であるが、関東大震災によって大破し、現在は庭園部分のみが清澄庭園として公開されている。この庭園は、もともとは江戸以来の伝統である沙入の庭(海水を引き込んでいる庭園)で、ここには全国からさまざまな庭石が運び込まれていることで有名である
 [出典：「鹿鳴館の建築家 ジョサイア・コンドル展」図録]

[1] 「ジョサイア・コンドル書簡史料の研究」鈴木博之著
 [文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書/2005]



訓盲院 | 視覚障害者教育施設の囃子(こうし)。ここにコンドルは簡素なロマネスク様式を用いた。汐留の新橋ステーション近くに位置していたが、ロマネスク様式採用の真の理由はわからない

[出典:「鹿鳴館の建築家 ジョサイア・コンドル展」図録]



上野博物館 | インドイスラム様式を採用したのは、コンドルなりのオリент理解の結果であった。温かみのある建物の色調は、弟子たちに愛されていたようで、コンドルを慕ってこの建物を眺めたというエピソードも残されている。関東大震災で大破し取り壊されたが、部材の一部が湯河原近くの別荘建築に再利用されていることが、最近判明した[出典:「鹿鳴館の建築家 ジョサイア・コンドル展」図録]



開拓使物産販売所本館 | 隅田川のほとりに建つことから、ヴェネチアン・ゴシック様式が採用されたと思われる。江戸の町は水の都であったことが、こうしたところからも窺われる。屋根が日本瓦で葺かれているために、一挙に建物が田舎臭くなってしまっている。

屋根の処理は世界的に難しい問題で、イタリヤ建築は雨も少ない地方なので緩やかな傾斜の屋根で済むが、アルプス以北の諸国では急傾斜の屋根を掛けねばならず、寒いので暖炉が必需品であり、そうなると煙突が屋根に現れるので、イタリヤルネサンス建築の姿を持ち込むことが難しかった。そこを逆手に取って、急傾斜の屋根に特徴を持たせたのが、フランス建築である。フランソワ一世様式は屋根に林立する煙突が見どころのひとつになる

[出典:「鹿鳴館の建築家 ジョサイア・コンドル展」図録]

の商社が、日本の近代化のためのお雇い外国人招聘、情報収集と斡旋に尽力したのでであろうと思われるのである。彼の師であったバージェス、そしてその親友であった建築家E・W・ゴッドウィンらは、当時知られはじめていた日本の芸術品に夢中になっていた。そしてコンドルもまた、そうしたジャポニズムの熱に感染した若き建築家だったのである。その興味は来日後のコンドルの幅広い日本探求となって現れる。彼は日本のさまざまなものをスケッチしたし、日本画を河鍋暁斎のもとで学んで、暁英(暁斎の弟子の英国人という意味であろう)という号を貰っているし、さらに彼の娘がスウェーデンの士官と結婚して儲けた孫であるウルスラにも暁瑞(暁斎の弟子のスウェーデン(瑞典)人という意味であろう)という名を貰うほどだった。

コンドルは日本画のみならず、衣裳、造園、生け花、演劇、さらには落語にまで興味を持って学んだ。その成果は論文となり著作となり、実践活動となっていった。建築家として、また建築教師としての仕事の傍ら、多様な活動を行ったコンドルはまさしく精力的なヴィクトリア朝人であった。

3—来日直後の様式選択

建築家としてのコンドルは、バージェスからゴシック様式の建築設計を学び、装飾についての感性も身につけた。この時代、建築はさまざまな歴史的様式を採用することによって設計されていたから、重要なのはどのような様式を選択するかであった。

日本にやって来たコンドルは、教育とともに建築設計にも直ちに携わることとなった。新橋近くにつくられた「訓盲院」[1879]、もとの寛永寺境内に建てられた「上野博物館」[1881]、そして隅田川畔に建つ「開拓使物産販売所本館」[1881]である。そこで彼は、それぞれの建物に様式を使い分けて用いた。訓盲院に対してはロマネスク風の様式を、上野博物館に対してはインドイスラム風の様式を、そして開拓使物産販売所本館に対してはヴェネチアン・ゴシック風の様式である。無論それぞれの様式は簡略化された、未熟な感の漂うものであるが、日本で施工することを前提にした意匠と考えれば、無理もないところである。

それでは建物ごとに異なる様式はなぜ選ばれたのであろうか。訓盲院は盲学校である。わが国初の視覚障害者教育機関として建てられたこの建築に、コンドルはロマネスク様式を用いた。教育機関には中世以来のゴシック建築が多く、コンドルもそうした建築ジャンルに結びついた様式を用いようと考えたのであろう。しかしゴシック様式の複雑さを考えると、来日第一号の建築に採用する様式としては躊躇される。そこでロマネスク様式の採用にいたったのではないか。建築の構成も単純であるし、ロマネスク様式にふさわしい。こうして構成が複雑ではない中世建築であるロマネスク様式が、訓盲院となって立ち現れたのである。

様式を選択基準がもっともわかりやすいものが、開拓使物産販売所本館である。この建物は隅田川のほとりに建てられた。明治の初め、この辺りは今よりずっと水の風情が濃厚に漂っていた。江戸以来、隅田川は町の動脈であり、猪牙船が行き交う大運河のような交通路でもあった。水の都であった江戸・東京にふさわしい様式として、ヴェネチアの様式が採用されたことは、リヴァイヴァリストの様式選択としては自然なものであった。場所の感覚を大切に結果が、ヴェネチアン・ゴシック風の様式となったのである。

上野博物館の場合、様式選択は歴史・地理的なものであった。ヨーロッパにおける博物館は、ギリシア・ローマ以来の文化の伝統を引くものとして古典主義建築が用いられることが多く、なかでもイオニア式のオーダーを用いた古典主義建築が多い。大英博物館、ベルリンのアルテスマゼウムなどを思い起こせば納得されるであろう。上野公園に建てられたわが国の博物館が西欧の正統的古典主義建築ではなく、インドイスラム風の様式によったのは、日本が西洋ではなく東洋の国であり、したがって、その文化圏の品物を取める博物館は東洋の様式を持つべきだと考えたからである。われわれの感覚では、インドイスラムは日本と関係がないが、西洋的感覚からはともにオリентなのである。こうした感覚はコンドルがロンドンで学び、身につけたものだった。

ヴィクトリア朝から20世紀初頭にかけての建築史家、J・ファーガソンやB・フレッチャーらは、建築様式を世界の文化圏に対応させて理解する、地理学的な建築様式史を基本としていたからである。

来日してからのコンドルは、日本の建築を研究し、その中で応用可能なものを西洋建築に取り入れようとした。彼自身、仏教寺院の火頭窓などを応用可能なモチーフだと言っているし、先に述べた開拓使物産販売所本館のインテリアには、仏教の祭壇の飾りのかたちである格狭間のモチーフを腰羽目に用いている。

こうしたかたちでわが国に建てられる西洋建築に日本らしさをもたらそうとするのが、コンドルの建築観であった。彼はそうした手法を学生やスタッフにも指導したようで、コンドルの指導を受けた工部大学の学生たちの卒業設計図面には、装飾の細部に牛若丸のような日本の人物像を配したものが目立つし、のちに足立鳩吉が上野博物館の傍らに設計した博物館別館には日本的装飾モチーフがちりばめられていた。

4—後期の円熟へ

典型的なヴィクトリア朝のリヴァイヴァル建築家であったコンドルは、やがて徐々にその様式観を変化させていく。そこにはふたつの要因があった。そのひとつは、わが国固有の問題といてよい耐震建築への指向であり、もうひとつの要因は明治の人々の要求であった。

明治24年[1891]に起きた濃尾地震は、西洋建築を導入しはじめたばかりの日本に、大きな試練を与えた。東京丸の内に三菱が計画していたオフィス街の設計をはじめていたコンドルは、地震の実態を調査すべく現地へ赴いた。スケッチを行いながら地震の被害を目に焼き付け、翌年、彼は建築学会で「各種建物に関して近來の地震の結果」と題する演説を行う。これは学会誌『建築雑誌』に掲載された。そこで彼は入念な施工が重要であると指摘し、レンガ造に鋼板を敷き込むことなどを奨励している。そして地震国において建築家は、第一に理学者であり、第二に美術家であるようにすべきだと結論している。

しかしながら同時に、コンドルは建築設計を行う建築家という職業を確立するための努力も怠らなかつた。彼は設計にあたっては契約書を取り交わし、設計料を取り、設計と施工に責任を負った。彼の仕事の仕方は、施主による直管工事の代理人という性格に近いもので、すべての工事費は彼の手を通じて支払われた。設計料率は工事費および人件費を合算したものの8%、もしくは7%であった^[2]。

技術者であり実務家であったコンドルは、後半生においては穏やかな古典主義を用いる建築家として、円熟の時代を迎える。「三井倶楽部」[1913]、「岩崎彌之助高輪別邸」(現・開東閣)[1908]、「古河虎之助邸」[1917]などの作品は、わが国の近代化とともにちからをつけていった財閥当主たちの、邸宅や迎賓施設をつくりあげる仕事であった。それぞれの建築には初期とおなじような吟味を経た様式が採用され、入念な施工がなされた。それは施主たちの要求でもあった。コンドルは教育者であり理学者であり実務家であり美術家であるという、多面的な活動を通して、建築家の姿をわれわれに示したのであった。まさしく彼はわが国西洋建築の父であった。

すずき・ひろゆき——建築史家/1945年生まれ。1968年、東京大学工学部建築学科卒業。1974年、同大学工学系大学院博士課程満期退学。同年、同大学工学部専任講師。1974-75年、ロンドン大学コートールド美術史研究所留学(英国政府給費留学生)。1978年、東京大学助教授。1984年、工学博士。1990年、同大学大学院教授(工学系研究科建築学専攻)。1993年、ハーヴァード大学客員教授(美術史学科)。2009年、東京大学定年退職。2009年-、青山学院大学教授。2010年-、博物館明治村館長併任。
主な著書:『建築の世紀末』[晶文社/1977]、『ロンドン—地主と都市デザイン』[筑摩書房(ちくま新書)/1996]、『ヴィクトリアン・ゴシックの崩壊』[中央公論美術出版/1996]、『都市のみなしみ—建築百年のかたち』[中央公論新社/2003]、『建築の遺伝子』[王国社/2007]、『東京の地霊』[筑摩書房(ちくま学芸文庫)/2009]など。

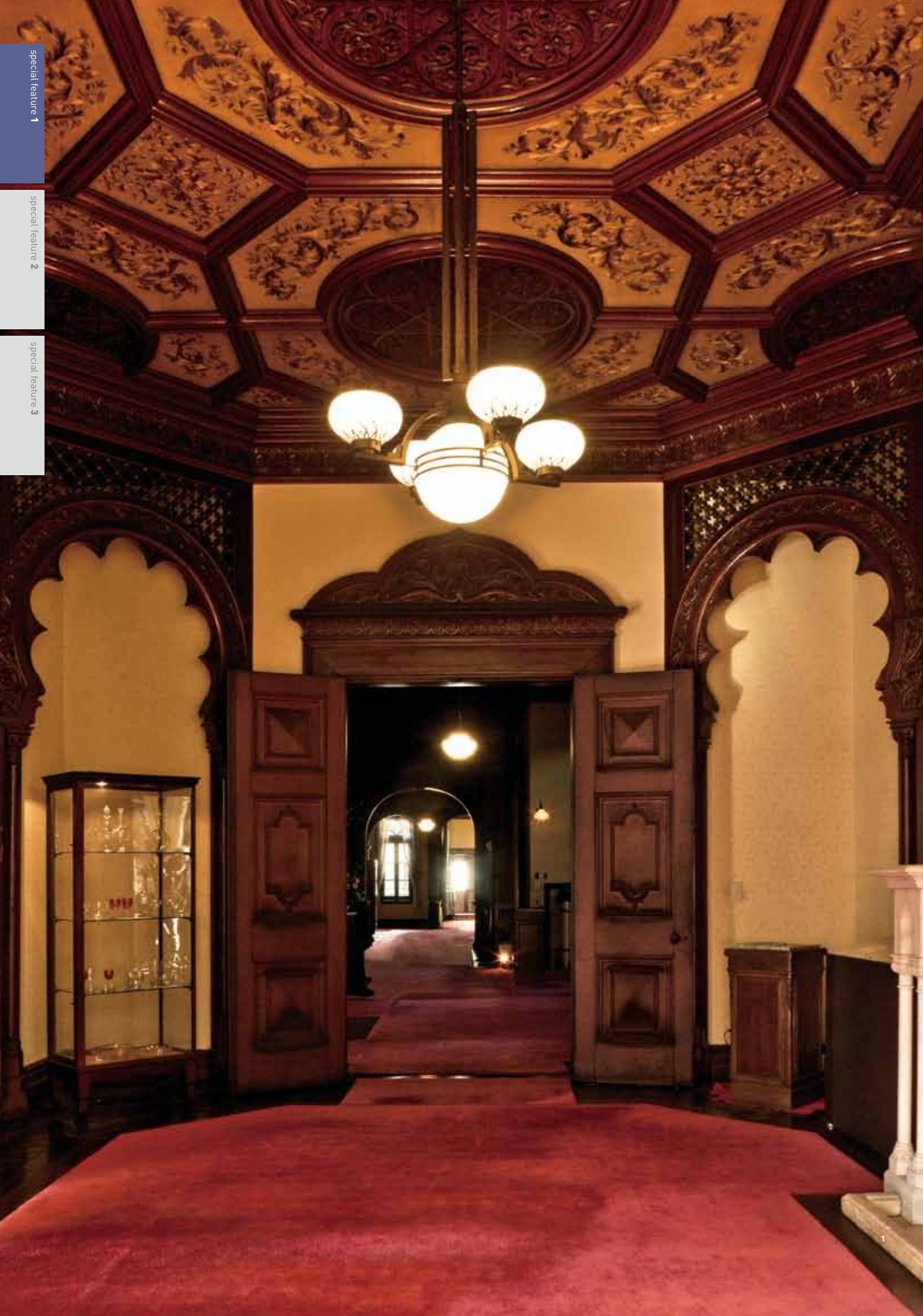


三菱一号館 | 丸の内のオフィス街の第一号の建築。三菱の銀行部や、総合商社であった高田商会などがここに入っていた。1968年、高度経済成長の波の中で取り壊されたが、バブル崩壊後、免震構造とした上で、当初のレンガ造によって再現され、美術館として活用されることとなった[出典:「鹿鳴館の建築家 ジョサイア・コンドル展」図録]



濃尾地震のスケッチ | コンドルは濃尾地震が起きた時、丸の内の開発計画を立案中であった。三菱に縁の深い外国商人グラバーらは、コンドルに濃尾地震を調査させることを三菱幹部に進言、コンドルが派遣された。彼は諸所でスケッチをし、日本建築学会で報告を行っている。コンドルはレンガ造を固く剛構造に固めることで耐震性を増そうと考えたようである。彼はレンガ積みの中に帯鉄を敷き込んで耐力を増す方法を採用している。レンガ造は重いので1階部分は重しが効いて崩れにくく、上階部分が倒れやすい。それに対して本造は屋根瓦が重かつたりすると、1階部分が押しつぶされてしまう。壊れ方が対照的なのである。関東大震災後、レンガ造建築では、最上階の取り壊しも行われている
[所蔵:東京大学工学部建築学科]

[2] コンドルの設計報酬に関しては、明治30年における華族会館(旧鹿鳴館)の修繕工事において工費の8%、明治32年に横浜で作成された「専門的業務および料金」というコンドル事務所の規程でも工費の8%とされていた。「岩崎彌之助邸」[1895]、「島津忠重邸」[1915]の場合には工費の7%が支払われたことが知られている



岩崎久彌邸

(現・旧岩崎邸庭園)

竣工年:1896年

所在地:東京都台東区池之端1-3-45
規模:地下1階、地上2階|構造:木造
重要文化財



2



3



4



5



6

1—1階婦人客室:イスラム風の多弁アーチが部屋の隅に設けられており、部屋に異国的な奥行きを与えている。「上野博物館」に見られたように、イスラム様式はオリエントの様式であるから日本にふさわしいとコンドルは考えていた。ここでは天井の 패턴にもイスラム風の円

形パターンが応用されている。コンドルはそうしたパターンや装飾モチーフを、当時刊行されていた建築図集から学び取っていた。また、天井には刺しゅうの施されたクロスも貼られ、婦人室らしさを示している
2—正面北面全景:庭園を敷地南に取り、入り口は北面に設ける。これはコンドルの定石である。敷地の南東隅にあった門から、大きく迂回しながら玄関にたどり着くように動線が計画されており、これも彼の定石である。木造で複雑な構成は、イギリス近世初頭のジャコビアン様式である
3—ホール:玄関を入り左手に行くと、このホールにいたる。仕上げの見事な木製の柱を持つ階段が屈曲しながら2階へと続く。装飾が豊かであり、ここがもっともジャコビアン様式が現れている部分である
4—2階客室:暖炉を備え、オーソドックスなまとめられた客室である。コンドルの力量はインテリア・デザインによ

く現れており、明治初期の洋風建築の多くが木造教室のようなインテリアであるのに対して、さすがにイギリス人の腕前を見せている。壁には金唐革紙という、凹凸を持ち、皮革のように加工した壁紙が貼られている
5—1階ベランダ:ベランダを持つことは、インドからアジアにかけての西洋館の特徴であった。ここでも南面全体にベランダが設けられている。印象批評なのであるが、この建物のベランダはアメリカ南部のプランテーションの館のベランダのように見える。当主の岩崎久彌がアメリカの農業にあこがれ、小岩井農場をつくりしているからそう見えるだけなのかもしれないが…
6—撞球室:スイスの木造のスタイルであるスイス・シャレーを応用した木造1階建てのビリヤード室である。母屋からは独立しており、庭園の点景建築という性格も持つようである。ビリヤード室は男性だけの空間であり、ここで紳士たちは男だけの世界に浸ったといわれる



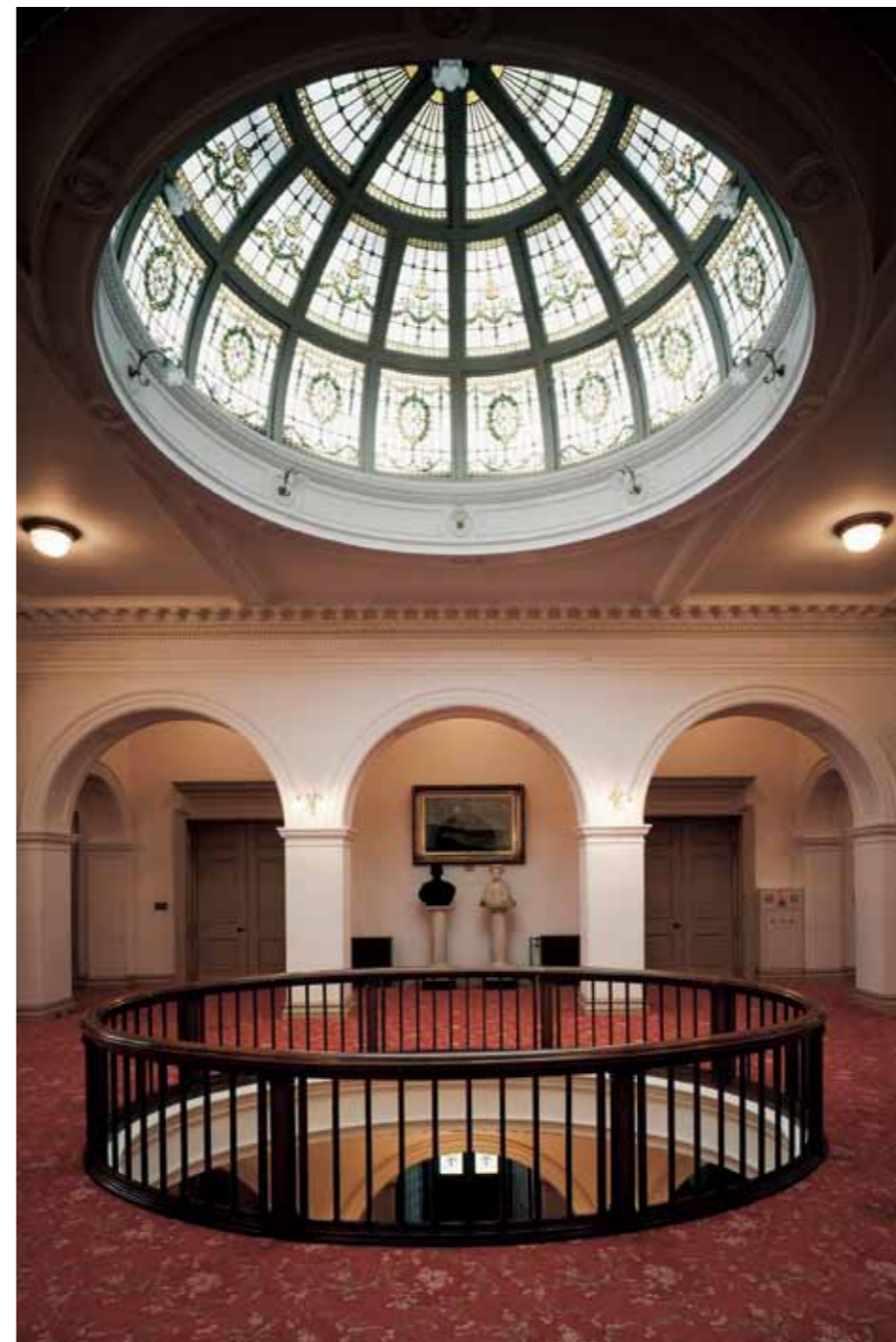
三井家倶楽部

(現・綱町三井倶楽部)

竣工年:1913年

所在地:東京都港区三田2-3-7

規模:地下1階、地上2階 | 構造:石レンガ造、一部S造
会員制倶楽部のため、一般には公開されていません



2



3



4



5

1—南面外観:庭園側の正面である。中央部が湾曲して張り出し、バロック的構成となっている。これがコンドル後期の様式である。しかし、もともとゴシック様式から出発したコンドルは、こうした古典主義的ディテールには精通していなかったようで、アーチには頂部の要石はあるものの、カーブが始まることを示す迫元の石が置かれていない。湾曲部分のカーブの納め方がうまく整理できなかったことによるのだろう

2—2階ホール:2階中央に設けられた、吹抜けとステ

ンドグラスによるドーム状の天窓部分である。もともとバロック的な構成を示すところであり、華やかなインテリアのハイライトである。この建物は関東大震災の被害を受けた後で、かなりの補修を行っており、写真に見られる三連のアーチ部分も補強されている。しかし見事な補強で、デザインに違和感をもたらしてはいない

3—エントランス:正面入り口は、すでにこの館で繰り広げられる華やかなパーティへの導入部である

4—大食堂:倶楽部建築にとって食堂はもともと重要な

部屋である。コンドルのインテリアは華美ではないが、十分な華やかさを持って客人たちを迎え入れる
5—2階バルコニー:先にも述べたように、湾曲している懐に特徴があり、ディテールをまとめるのが難しい部分である。ここでは美しい床のタイルが、この空間を魅力的なものにしている。19世紀のイギリスは見事なタイルを数多く生み出しており、コンドルはそうしたタイルを輸入してうまく配している

[写真:「綱町三井倶楽部」[三井不動産/1990]]



古河虎之助邸

(現・旧古河庭園大谷美術館)

竣工年:1917年

所在地:東京都北区西ヶ原1-27-39

規模:地下1階、地上2階 | 構造:石・レンガ造



2



3



4

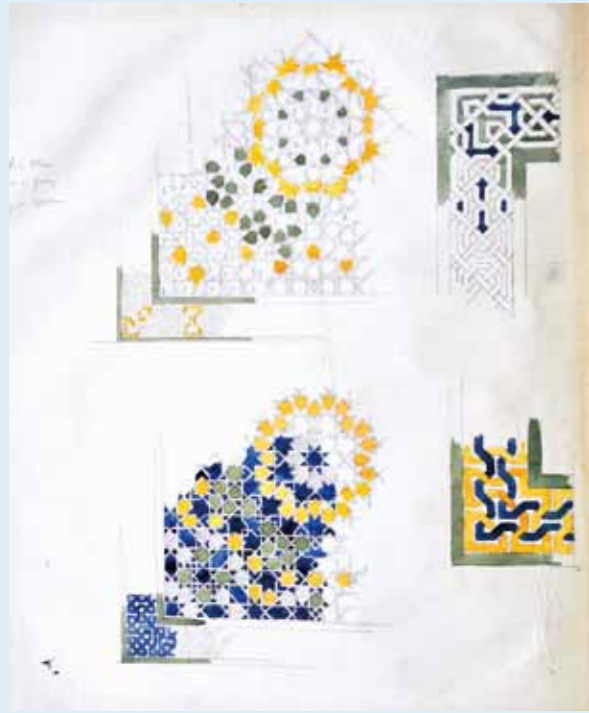
1—1階大食堂:古河邸の主たる空間である。木製の羽目板、木製の暖炉周りの構成が、インテリア全体に落ち着いた雰囲気をもたらしている。この部分のインテリアは、戦後の修復によって再生されたものである

2—南面全景:真鶴の新小松石を用いた、石による仕上げの構成である。両脇に切妻屋根を見せるのはハーフティンバーの館の構成法を思わせるが、重厚な石造であることによって、この建物はコンドル後期の作品群の中でも異彩を放っている

3—1階廊下:動線と採光をうまく処理しながら、落ち着いた空間をつくり出している

4—2階客間:コンドル自らがまとめたと思われる和室である。心なしか高さ方向に伸びているような印象を与えるが、興味深いインテリアである。外観は西洋館なので、和室の障子と外部に面する洋風の窓との間に細い廊下状のスペースを設け、和洋の取り合いを処理している。2階にはこの客間以外に和室でつくられた仏間もあり、コンドルの日本建築研究の総決算とも見ることができる [撮影:2005年]

1



1



3



4

1—イスラム装飾のスケッチ:デザイン・モチーフの研究の一環である|2—ステンドグラスのスケッチ:コンドルはステンドグラスについても学んでいた|3—教会のスケッチ:建築スケッチは、当時の建築家たちの修行のひとつであった|4—ホランドパークのスケッチ:ロンドンの公園である。この近くにコンドルの師、バージェスの自邸があり、彼が学んだサウスケンジントンも近い。来日以前のスケッチである|5—雲廊(水彩画):コンドルは近世の装飾的建築に強く惹かれていた。この水彩画は芝の徳川家霊廟ではないかと思われる|6—滝のスケッチ:水彩画家としての力量がよく窺われる。来日後、彼は日本画家・河鍋曉斎について、日本画を学ぶ|7—こもり:日本画の手習いである。絹布に描かれている|8—みみずく:作品として仕上げられた日本画|9—女性の髪型:コンドルはしばしば旅館で女性の髪型などをスケッチしている。アール・ヌーヴォー的な曲線美に興味を持ったのであろうか
[所蔵:東京大学工学部建築学科]



2



5



6



7



8



9

著作権所有者の都合により
掲出できません

著作権所有者の都合により
掲出できません

10—教会 立面図、平面図、断面図:コンドルによる本格的教会設計図。実現されたか否かは不明
11—古河虎之助邸 本館立面図、断面図:コンドルの手になる、庭園構成を含む設計図は珍しい
[所蔵:京都大学大学院工学研究科建築学専攻、出典:『ジョサイア・コンドル建築図面集3』[河東義之編、中央公論美術出版/1981]]

嘉永5年[1852] 9月28日、ロンドン・テムズ川南岸ケニントン二区に生まれる。祖父や父の名を襲名し、ジョサイア三世の誕生となる(父親の曾祖父ルイ・フランソワ・ルビアクは、18世紀の英国で最高の彫刻家という由緒ある家系であった)

慶応元年[1865] ベッドフォードのモダンスクールに入学

明治2年[1869] サウスケンジントン・アート・スクール、およびロンドン大学のスレード・ライフ・クラスで建築学を学ぶ

明治6年[1873] 英国王立建築学会のT・ロジャース・スミス教授(父ジョサイアの従兄弟)につき、その後、ゴシック建築の大家ウィリアム・パーゼス博士の助手となる

明治7年[1874] 10月、イギリス南部、フランスへスケッチ旅行

明治8年[1875] パーゼスの事務所を退職。画家ワルター・ロンスダールの助手となり、ステンドグラスの製作を学ぶ

明治9年[1876] 3月、王立建築家協会主催の懸賞設計に応募して入賞し、ソーン賞を受賞。10月18日、日本政府と5年間の雇用契約を結ぶ。10月、日本へ出発。途中、フランス、イタリアでスケッチ旅行

明治10年[1877] 1月28日、日本到着。2月28日、内閣工部省技術官、ならびに工学寮教師として、工部大学校造家学科の外国人教師を担当、併せて内匠寮に出任する。麻布今井町官舎に入居

明治12年[1879] 11月、工部大学校第一期生・辰野金吾、片山東熊、曾彌達蔵、佐佐七次郎が卒業

明治13年[1880] 8月、長女ハル(英国名ヘレン)誕生。10月、「日本衣裳史第一部」を発表

明治14年[1881] 12月、「日本衣裳史第二部」を発表。この年、皇居造営顧問技師。画家・河鍋曉斎に入門

明治16年[1883] 曉斎から「曉英」の号を受ける

明治17年[1884] 2月、第二回内国絵画共進会で「雨中鷺」など入選。4月、勲四等に叙せられ旭日小綬章を賜る。11月、英国王立建築家協会正会員となる

明治18年[1885] 9月、京橋西紺屋町官舎へ移転

明治19年[1886] 3月、「日本の山水庭園の芸術」を発表。4月、東京帝国大学建築学科講師。11月、学生17名を引率してドイツへ出張、ロンドンへ帰省

明治20年[1887] 6月、ロンドンから帰国。この年、「日本の

住宅建築について」を王立建築家協会で発表

明治21年[1888] 3月、講師辞任。事務所を西紺屋町に設置、建築設計に従事

明治22年[1889] 10月、「日本の生花論」を発表

明治23年[1890] 三菱社の顧問となる

明治24年[1891] 6月、「日本の花と生け花の芸術」を出版。10月、濃尾地震の被害を視察

明治25年[1892] 東京帝国大学名誉教授

明治26年[1893] 5月、「日本の風景庭園」を出版。この後『別冊付録』を出版。7月、前波くめと結婚

明治27年[1894] 3月、勲三等瑞宝章を賜る

明治29年[1896] 2月、東京演劇音楽協会に参加。4月、第一回演劇公演に参加。10月、「日本の生花」を3回にわたり発表

明治32年[1899] 6月、「日本の花の芸術」を出版

明治34年[1901] 4月、長女ハルを連れて一時帰国

明治37年[1904] 西紺屋町から三河台へ転居

明治44年[1911] 5月、「河鍋曉斎の絵と習作」を出版

大正3年[1914] 2月、工学博士の学位授与

大正9年[1920] 4月、日本建築学会から表彰を受ける。6月10日、夫人くめ逝去。6月21日、コンドル逝去(67歳)。護国寺墓地に埋葬

主な作品 | Works | ●印は現存 | ※印は計画案

明治10年[1877] 工部大学校(南門・門衛室)(東京) | 東京大学建物配置案(東京)※

明治12年[1879] 訓盲院(東京)

明治14年[1881] 開拓使物産販売所本館(東京) | 上野博物館(東京)

明治15年[1882] 宮内省庁舎(東京) | 川村純義邸(東京) | 皇居山里正殿並吹上宮内省庁舎(東京)※

明治16年[1883] 鹿鳴館(東京) | 伏見宮邸(東京)※

明治17年[1884] 延邊館(東京) | 有栖川宮邸(東京) | 東京大学法文科大学校舎(東京) | 西京表公旅館(京都)※ | 北白川宮邸(東京)

明治18年[1885] 中央諸官庁配置案(東京)※

明治19年[1886] 内務大臣官舎(東京) | 陸軍大臣官舎(東京)

明治20年[1887] 外務次官官舎(震霞閣官邸)(東京) | 外務省官舎(東京)

明治21年[1888] 飯倉教会(増築)(東京)※ | 香蘭女学校校舎(東京)

明治22年[1889] カークウッド邸(東京) | 岩崎彌之助深川別邸(東京) | 砲兵工廠本館(東京) | 内閣庁舎(東京)

明治23年[1890] 横浜築港事務所(神奈川) | コンドル大磯別荘(改修)(神奈川)

明治24年[1891] ニコライ堂(東京復活大聖堂)(東京)●

明治25年[1892] 岩崎彌之助邸(東京)※ | 海軍大臣官舎

(東京)

明治26年[1893] 築地トリニティ教会内装飾(東京) | 荘田平五郎邸(東京)

明治27年[1894] 唯一館(東京) | 基督教青年会館(東京) | 海軍省庁舎(東京) | 三菱一号館(東京)

明治28年[1895] 飯倉教会(東京) | 三菱二号館(東京) | 岩崎彌之助邸(東京)

明治29年[1896] スクリバ邸(東京) | 東京倶楽部(初代)(東京) | 三菱三号館(東京) | イタリア公使館(増築)(東京) | 岩崎久彌邸(東京)● | 英国公使館別荘(栃木)●

明治30年[1897] ドイツ公使館(東京) | 長崎ホテル(長崎)

明治31年[1898] ケリー・ウォルシュ商会(神奈川) | ロイヤルホテル(神奈川)

明治32年[1899] 立教女学院(東京) | オーストリア・ハンガリー公使館(東京)

明治33年[1900] 高田慎蔵邸(東京) | 横浜山手教会(神奈川) | 横浜山手85番病院(神奈川)

明治34年[1901] ユナイテッドクラブ(神奈川) | 高田慎蔵青山別邸(東京) | ストロム商会(神奈川) | サムエル・サムエル商会(神奈川)

明治36年[1903] ベルギー公使館(増築)(東京)

明治37年[1904] コンドル邸(東京)

明治38年[1905] 松方正義仙台坂別邸(東京) | 松方正義邸(東京)

明治39年[1906] 鎌倉海浜院ホテル(神奈川) | 益田孝郎(東京) | 渡辺専次郎鎌倉別邸(神奈川)

明治40年[1907] 赤星彌之助大磯別邸(神奈川) | 末延道成邸(東京)

明治41年[1908] 岩崎彌之助高輪別邸(東京)● | ウエスト像台座(東京)●

明治42年[1909] 寺島誠一郎邸(東京) | 岩崎彌之助箱根湯本別邸(神奈川) | 小笠原教会(東京) | 近藤廉平邸(東京)

明治43年[1910] 岩崎彌之助家廟(東京)●

明治44年[1911] アーウィン邸(東京) | 加藤高明邸(東京)

明治45年[1912] 岩永省一郎邸(東京) | 園田孝吉邸(東京) | 赤星鉄馬邸(東京) | 東京倶楽部(二代目)(東京)

大正2年[1913] 諸戸清六邸(三重)● | 今村繁三邸(東京) | 岩崎小彌太元箱根別邸(神奈川) | 三井家倶楽部(東京)●

大正4年[1915] 岩崎久彌邸(東京)※ | 島津忠重邸(東京)● | マクドナルド墓石(イギリス)※

大正6年[1917] 北下浦別邸(神奈川)※ | 古河虎之助邸(東京)●

大正7年[1918] 山縣有朋小田原別邸(増設)(神奈川)

大正8年[1919] 成瀬正行邸(東京)

大正9年[1920] 串田萬蔵邸(東京) | 木村敬義邸(東京)

大正10年[1921] 川崎芳太郎邸(兵庫)※

※このページは、「鹿鳴館の建築家 ジョサイア・コンドル展」図録[建築画報社/2009]をもとに、編集部が制作したものです

取材協力:財団法人大谷美術館/旧岩崎邸庭園/京都大学大学院工学研究科建築学専攻/新建築社写真部/三井不動産
参考資料:「鹿鳴館の建築家 ジョサイア・コンドル展」図録[建築画報社/2009] | その他:特記のない写真は撮り下ろしです